

「今日の説教、聴き手のために」 2014/3/30 明治学院教会 (331)

(このプリントは、説教ごとに作っているものです) 牧師 岩井健作

『神の国を受け継ぐ者』 エフェソの信徒への手紙 4章25節-5章5節。

「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。」(5:1)

1、私たちが、ある人への印象を持つ場合、その人が語ったことよりも、どう振る舞ったかの方が心に残ります。かつてインドを訪問した時、マザー・テレサの名のもので行われている幾つかの施設に伺いました。ヒンズー教 75%, イスラム 15%, キリスト教 0.2%の国なのに、打ちひしがれた弱者、貧者、病者、死に行く者へのケアなどは、宗教を超えて、多くの人々の希望になっていることを感じました。キリスト教では教えも大切ですが、行為が目に見える証になっているか否かの大事さを感じました。そして教えと行為の緊張関係を生きているシスターたちの働きに教えられました。

2、「エフェソへの手紙」の特徴は、信仰の基礎と実践との緊張関係を伝えていることです。1-3章は、「教え・基礎」(特に教会論)で後半4-6章は「実践・倫理」です。その間に「執り成しの祈り」がありました。(3:14-21 先日説教参照)。その緊張は例えば「眠りにについている者よ、起きよ。死者のなかから立ち上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる」(5:14)という古代の洗礼式の時の讚美歌の引用などがよく語っています。「キリストがあなたを照らす」は「神の恵み」の事実です。「起きよ」とは呼び掛けです。「事実・真理」が呼び掛けで「現実・体得」になるのです。25節-29節「・・・真実を語れ・・・その人を造りあげるのに役立つ言葉を・・・語れ」までは、人間として生きるための基礎的倫理です(実際当時の教会では「盗むな」が語られねばならない事実があったのでしょうか)。そして続いて「聖霊を悲しませてはいけません」(30)は、旧約イザヤ 63:10の神を苦しめるイスラエルの民が思い浮かべられています。私たちが本気で人間の命を守る闘いを(最低限「十戒」の犯罪“盗まない”を犯さないの如きを)怠るならば、人間を本気で信頼して、救い(贖い)を成し遂げられた神が悲しむということです。31節の古代悪徳倫理表のような「無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしり」を「一切の悪意と一緒に捨てなさい」とあります。何かを身に付けるより「捨てる」が強調されます。これは前段「古い人を脱ぐ捨て」(4:22)と同じ単語です。「赦し合う」も極めて日常的倫理です。5章に入りますと、「(キリストの) 香り (旧約のはん祭 が背景にある)」「神に倣う者となりなさい」と抽象化した語り口に続いた後で、「卑猥な言葉、下品な冗談」など生活の細部に関わる卑近な戒めが語られます。日々の生活の品位を身に付けるという些細なことが、「神の国を継ぐ」という根本的な出来事と、緊張関係に在ることが示されています。

3、聖書にはこの「促しと約束」というパターンが頻繁に出てきます。「求めよさらば与えられん」(マタイ 7:7 ルカ 11:9)は典型的な類型です。この緊張関係を生きることが、福音の現実化ということでしょう。他の言葉で表現すれば「体得契機(受け継ぐ)」と「真理契機(神の国)」の緊張関係です。「真理(教え、信条、教理)」を頭だけで把握しているキリスト者が日本の近代(知識人層を中心にしたキリスト教)には多いことが、戦後の歩みで自省されました。「戦争責任告白」(日本基督教団 1967年)などもその一つ反省の表れです。「体得(福音の現実化)契機」を大事にして、(頭と口の達者なキリスト者ではなくて)、地道に一歩一歩、日常と社会の生活を積み上げるキリスト者でありたいと思います。「神の国」は「受け継ぐ」ものなので。「棚ぼた」でやってくるものではありません。